二〇一八年度
東京都公立高校入試問題

五〇分
一〇〇点

一 次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 洋服のほころびを繕う。

(2) 日本の伝統的な舞踊を鑑賞する。

(3) 午後の列車には若干の空席がある。

(4) 善戦するも一点差で惜敗し、優勝を逃す。

(5) 忙しさに紛れて、弟に頼まれた用事を忘れる。

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
う				れて

二

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 浜辺で美しい貝殻をヒロう。

(2) 母のキョウリから、みかんが届く。

(3) 今年の春から、姉は図書館にキンムする。

(4) 幼い妹たちの言い争いをチュウサイする。

(5) 帰宅すると、愛犬がイキオいよく駆け寄ってきた。

う　　い

三

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

> 中学校一年生の「わたし」と後ろの席に座る上野とは、小学生の時は互いの家を行き来して遊ぶ間柄であった。中学校入学後、「わたし」は陸上部に入り、上野は部活に入らなかったこともあって、それぞれ違う友人の輪の中にいることが多くなり、話す機会がなくなっていた。

教室には休み時間のだらけた雰囲気が残っていた。わたしも体を半分上野の方へ向けて座っていた。しかし上野に話しかけたくても、どう接して良いものか分からず、話の糸口を上手く摑めないでいた。

上野は辞書を熱心に読んでいた。見るからに古く、年季の入った辞書だった。四隅がぼろぼろで、頁も手垢で黒ずんでいた。箱もなく、白かったであろう表紙はねずみ色と言っていいぐらいで、金色の題字は剝がれてほとんど残っていない。しかしそんな辞書とは対照的に、それを読む上野の目は爛々と輝いていた。彼の目にわたしの姿は映っておらず、わたしは不思議と苛立ちを覚え、気が付いた時には乱暴に言葉を発していた。

「お前、汚い辞書使ってんな。」

言葉が舌の上を通り抜けた瞬間から、激しい後悔が襲った。たしかに上野の使っている辞書は、お世辞にも綺麗とは言い難い代物だった。だからといって、他にいくらでも言いようがあっただろう。わたしは自分の声が周りに聞こえていることも十分に意識していた。お前、汚い辞書使ってんな。鼓動が激しくなる中、顔をあげた上野と目が合った。つぶらな、大きな目だった。こちらをじっと見つめかえしながら彼は言った。

「うん、母さんがくれたんだ。大学の時に買ってもらった辞書なんだって。」

屈託も*衒いもない言い方だった。わたしは彼が言おうとしたことが何一つ呑み込めずにいた。どうして上野の母が出て来るのか、ダイガクとは何か、だからどうだというのか、わたしにはよく分からなかった。しかし、何よりもその口調がわたしの心を打った。それは昔

と変わらない、心を許した相手にだけ向けた穏やかな話し方だった。(1)わたしはろくに返事もできず、ちょうど先生が教室へ入ってきたのを良い事に、上野に背を向けた。

授業が始まっても、内容は頭に入って来なかった。こちらを見つめかえした上野の目の印象がなかなか頭から去らなかった。振り払おうと必死になる度に、後ろから辞書をめくる音が聞こえた。時折、紙が折れたり頁が破けたりする音も混じっていた。わたしは一二度(いちにど)そっと振り返りもしたが、上野はこちらに気付く素振りもなく、相変わらず目を輝かせながら辞書を引いていた。

わたしは先ほどの上野の言葉に思いをめぐらせた。上野の母親には、何度か会ったことがあった。大概は彼の家にいる時で、二人で遊んでいると夕方ごろにどこからか帰ってきて、二言三言挨拶を交わした。いつも黒い髪を後ろに束ね、忙しそうにしていた。しかし、もっとも印象に残っているのは、彼女が書斎に居た姿だった。トイレを借りた帰りの廊下で、いつもは閉じている部屋のドアが開いているのにわたしは気が付いた。人の気配がしたので、わたしは気になって覗(のぞ)いてみると、そこに上野の母親がいた。書棚に囲まれた机に大きな本を何冊か広げながら、はっとするほど冷たい横顔で座っていた。調べごとか、考え事をしている風だった。(2)二重の目はいつも以上に大きく開かれ、遠い場所を追っていた。まるで目の前の本ではなく、その向こう側にいる誰かを見つめているようだった。

上野の母の白い手が頁をめくった音でわたしは我に返り、見てはならないものを見た気がして黙ってその場を後にした。自分はなぜあれほど動揺したのだろうか。もしかしたら大の大人が勉強をしている姿を見たのが初めてだったからかもしれない。自宅に帰ってから、わたしは自分の親に上野の家で見たことを率直に告げた。母親からは、上野の母は「ガクシャ」だからという答えが返ってきたのを覚えている。わたしには「ガクシャ」も「ダイガク」も「母さんがくれたんだ」という言葉も、そして辞書をめくる音の意味もうまく咀嚼(そしゃく)できないまま授業は終(お)わりを告げた。自分の失言のせいもあって、上野との間にいっそうの隔たりを感じ、わたしはそれっきり上野と会話を交わすことがなかった。

秋の新人戦に向けて多忙な時期でもあり、友人達(たち)と大声で笑い合ううちに、わたしは辞書のことを忘れ、国語の授業中に聞こえる紙の音も次第に気にならなくなった。わたしの未使用の辞書は教室の後ろのロッカーに入れられたまま放置された。

しばらく後の美術の授業でのことだった。わたしは試合で使う予定のスパイクシューズの絵を描いていた。思い入れのある持ち物を題

材に選ぶように言われ、わたしは迷わず卸し立てのスパイクを選んだ。青いラインの入ったスパイクの靴底からは八本の釘（くぎ）が鋭く光っていた。

ふと筆を休めた時に、斜め向かいの班に上野がいるのが目に入った。わたしの胸に思い出したくないものがぶり返してきた。彼の前に、あの辞書があったからだ。改めて見ると、くすんだ白い表紙は辞書そのものからほとんど取れかけている。あんなみすぼらしい辞書では不恰好（ぶかっこう）な絵になるに違いないのに、どうして題材に選んだのだろうと思った。

途端、おそろしく身勝手で愚かな邪推が、つまり、わたしへの当てつけであの辞書を描こうとしているのではないかという考えがわたしの頭に浮かんだ。そう思った瞬間に上野が顔を上げ、また視線が交錯しそうになった。(3)わたしはすぐに目を伏せ、絵の具を混ぜる振りをしてやり過ごした。出鱈目（でたらめ）に色を混ぜながら、上野が辞書を引っ込めて、別の物を題材に選んでくれたらいいのにと願ったが、上野は辞書の絵を描き続けた。

陸上部の秋季大会は惨憺（さんたん）たる結果で、自己ベストにすら遠く及ばず、慣れない靴のために足首を捻（ひね）って最後の跳躍も叶（かな）わなかった。学校行事も遠足に期末試験と慌ただしく続き、あっという間に冬休みが訪れた。一年前は暇さえあれば上野の家のインターホンを鳴らしに行ったが、年末年始は部活もさほどなく、わたしは所在なく冬休みを過ごした。

年が明け、一年生最後の学期が始まった。美術の時間では、二学期に描いた絵が返却された。わたしのスパイクはべたっとした単調な絵で、どう見てもそれは地上から跳び上がるための道具に見えなかった。秋季大会のことも思い出され、わたしはすぐさま絵を作業台の下に隠した。そして、そのまま美術室に絵を忘れてきてしまった。誰かに見られると恥ずかしいので、放課後に部活に行く振りをしてこっそりと取りに行った。

美術室は閉まっていた。隣の準備室にも先生はおらず、わたしはしばらく廊下をうろつき、展示されている作品を眺めた。廊下には出来の良かった作品が幾つか数珠繋（じゅずつな）ぎに吊（つ）るされていた。どの絵もわたしのより上手く描けていたが、だからと言ってわたしと関わり合いのあるものには感じられなかった。

職員室に先生を探しに行こうかと考え、絵の前を引き返していると、その中の一枚が目に留（とま）った。上野の絵だった。一番隅にあったので見逃していたのだ。わたしは足を停（と）め、そこに描かれたあの辞書を見た。辞書は本物そのものの様に汚れが目立ち、日に焼けてくすん

でいた。絵に鼻を近づけたら、古びた紙の匂いまで漂ってきそうだった。開かれた辞書をぼんやりとした光の帯が包みこんでいた。

忘れていた嫌な感情がよみがえってきそうになった。しかしわたしは奇妙にその絵に引き寄せられていた。よくよく見ると、辞書のくすみや汚れは、出鱈目につけられたものではないことがわかった。まるで雪原の足跡のような、その一つ一つが辞書についた人の指紋の形を成していた。指跡は見開きの頁ばかりでなく、辞書の側面にもびっしりと描かれていた。わたしは上野の手と彼の母親の姿を思い出した。(4)上野が何故(なぜ)あれほど熱心に辞書を見ていたのか分かった気がした。

すると、辞書の周りにあった、単なる光の筋だと思われたものが、辞書へ伸びる指であり腕で、一冊の書物へ向かって何度も伸ばされたものの残像であることに気が付いた。細く白い幾つもの手が辞書を目指し、あるいはその遥(はる)か向こう側へ向かって伸ばされ、互いを支え合うようにして幾重もの層を成していた。

唐突に、わたしのなかの靄(もや)が晴れていった。上野の母親の視線のゆくえも理解できる気がした。彼女の姿に上野が重なってゆき、わたしは受け継がれていく人の営みを感じずにはいられなかった。そう思うと、わたしの目には辞書に書かれている字すらも人々の指跡で出来ているように映った。(5)それに指を重ねるように、そっとわたしは手を伸ばしていた……。

（澤西祐典「辞書に描かれたもの」より）

〔注〕　衒(てら)い――ひけらかすこと。

〔問1〕 (1) わたしはろくに返事もできず、ちょうど先生が教室へ入ってきたのを良い事に、上野に背を向けた。とあるが、「わたし」が「ろくに返事もできず、ちょうど先生が教室へ入ってきたのを良い事に、上野に背を向けた」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　淡々とした口調であったが、今までにないほど強いまなざしで上野が見つめてくるので、何を言っても許してもらえないと思ったから。

イ　温和な言葉で話す上野に比べ、自分はあまりにひどいことを言ってしまったと気付き、謝りたいと思いつつも決心がつかなかったから。

ウ　上野に無視されたように感じて思わず心無い言葉を発したが、打ち解けた話し方に驚き、何と答えてよいか分からなくなったから。

エ　自分には理解できない話題について、遠慮も気遣いもない言い方で話してくる上野の態度を不審に思い、何も言えなくなったから。

〔問2〕 (2) 二重の目はいつも以上に大きく開かれ、遠い場所を追っていた。まるで目の前の本ではなく、その向こう側にいる誰かを見つめているようだった。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　たくさんの本を読もうと意気込む上野の母の様子を、生き生きと表現するとともに、たとえを用いることで躍動的に表現している。

イ　本を読んで思索にふける上野の母の様子を、豊かな感覚で捉えて表現するとともに、たとえを用いることで印象的に表現している。

ウ　昔会った人を本で調べる上野の母の様子を、時間の経過に従って表現するとともに、たとえを用いることで説明的に表現している。

エ　息子の友人を無視して本を読む上野の母の様子を、ありのままに表現するとともに、たとえを用いることで写実的に表現している。

〔問3〕 (3)わたしはすぐに目を伏せ、絵の具を混ぜる振りをしてやり過ごした。とあるが、この表現から読み取れる「わたし」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　上野は辞書をけなした自分を今でも受け入れていないと気付いて、目を合わせることはできないと思い、関わらないようにしている様子。

イ　絵の題材として辞書を選ばないでほしいという自分の勝手な願いが、上野に気付かれそうになったことに動転し、うろたえている様子。

ウ　先日の失言を思い出して嫌な気持ちになったので、今日は上野に何も言わないようにしようと思い、絵を描くことに集中している様子。

エ　辞書を描くのは自分を非難するためではないかという疑いを上野に悟られないように、とっさに下を向き、平静をよそおっている様子。

□

〔問4〕 (4)上野が何故(なぜ)あれほど熱心に辞書を見ていたのか分かった気がした。とあるが、「わたし」が「上野が何故あれほど熱心に辞書を見ていたのか分かった気がした」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　丹念に描かれた指跡を見て、真摯に学ぶ母の姿が重ねられているように感じ、書斎での母の様子と辞書を読む上野の様子が結び付いたから。

イ　無数の指跡は、努力して学んだ母の姿にあこがれて描いたものだと気付き、母の引き方をまねて上野は頁をめくっていると確信したから。

ウ　絵に描かれた指跡を見ていると、頁をめくる母の手の動きが想像でき、その動きは辞書を読む上野の手の動きと同じだと気が付いたから。

エ　上野が描いた絵を丁寧に見ることで、辞書についたくすみや汚れが、実は母が何度も引いたときについた指跡だったのだと分かったから。

〔問5〕 (5)それに指を重ねるように、そっとわたしは手を伸ばしていた……。とあるが、このときの「わたし」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　辞書の文字を読むことで知識を増やしていくという過去から脈々と人間が続けてきた営みを、母から受け継いだ辞書を描くことで、自分に教えようとした上野に対して感謝したいと思う気持ち。

イ　先人の知識が凝縮している文字を学んで後世に伝えるという人間が続けてきた営みを、上野は学者になることで母から受け継ごうとしているのだと分かり、自分も負けずに勉強したいと思う気持ち。

ウ　過去の人々が文字で残した知識について学ぶという人間が続けてきた営みを、上野が受け継ごうとしていることに気付かずに、母からもらった大切な辞書を汚いと言ったことを謝りたいと思う気持ち。

エ　昔の人々が伝えようとした知識を文字によって学ぶという人間が続けてきた営みを、母と同じように上野が受け継ごうとしているように感じ、自分もその営みの一端に触れてみたいと思う気持ち。

□

四　次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

私が何ごとかをなすとき、私は意志をもって自分でその行為を遂行しているように感じる。また人が何ごとかをなすのを見ると、私はその人が意志をもって自分でその行為を遂行しているように感じる。(1)しかし、「自分で」がいったい何を指しているのかを決定するのは容易ではないし、「意志」を行為の源泉と考えるのも難しい。（第一段）

このことは心の中で起こることを例にするとより分かりやすくなるかもしれない。たとえば、「想(おも)いに耽(ふけ)る」といった事態はどうだろうか。私が想いに耽るのだとすれば、想いに耽るのは確かに私だ。だが、想いに耽るというプロセス＊がスタートするその最初に私の意志があるとは思えない。私は「想いに耽るぞ」と思ってそうするわけではない。何らかの条件が満たされることで、そのプロセスがスタートするのである。また、想いに耽るとき、私は心の中で様々な想念が自動的に展開したり、過去の場面が回想として現れ出たりするのを感じるが、そのプロセスは私の思い通りにはならない。意志は想いに耽るプロセスを操作していない。（第二段）

心の中で起こることが直接に他者と関係する場合を考えてみると、事態はもっと分かりやすくなる。謝罪を求められた場合を考えてみよう。私が何らかの過(あやま)ちを犯し、相手を傷つけたり、周りに損害を及ぼしたりしたために、他者が謝罪を求める。その場合、私が「自分の過ちを反省して、相手に謝るぞ」と意志＊しただけではダメである。心の中に「私が悪かった……」という気持ちが現れてこなければ、他者の要求に応えることはできない。そしてそうした気持ちが現れるためには、心の中で諸々(もろもろ)の想念をめぐる実に様々な条件が満たされねばならないだろう。（第三段）

逆の立場に立って考えてみればよい。相手に謝罪を求めたとき、その相手がどれだけ「私が悪かった」「すみません」「謝ります」「反省しています」と述べても、それだけで相手を許すことはできない。謝罪する気持ちが相手の心の中に現れていなければ、それを謝罪として受け入れることはできない。そうした気持ちの現れを感じたとき、私は自分の中に「許そう」という気持ちの現れを感じる。もちろん、相手の心を覗(のぞ)くことはできない。だから、相手が偽ったり、それに騙(だま)されたりといったことも当然考えられる。だが、それは問題ではない。重要なのは、謝罪が求められたとき、実際に求められているのは何かということである。確かに私は「謝ります」と言う。しかし、実際には、私が謝るのではない。私の中に、謝る気持ちが現れることこそが本質的なのである。（第四段）

こうして考えてみると、「私が何ごとかをなす」という文は意外にも複雑なものに思えてくる。というのも、「私が何ごとかをなす」という仕方で指し示される事態や行為であっても、細かく検討してみると、私がそれを自分で意志をもって遂行しているとは言いきれないからである。（第五段）

謝るというのは、私の心の中に謝罪の気持ちが現れ出ることであろうし、想いに耽るというのも、そのようなプロセスが私の頭の中で進行していることであろう。にもかかわらず、われわれはそうした事態や行為を、「私が何ごとかをなす」という仕方で表現する。というか、そう表現せざるをえない。（第六段）

「私が何ごとかをなす」という文は、「能動」と形容される形式のもとにある。たった今われわれが確認したのは、能動の形式で表現される事態や行為が、実際には、能動性のカテゴリー*に収まりきらないということである。能動の形式で表現される事態や行為であろうとも、それを能動の概念によって説明できるとは限らない。「私が謝罪する」ことが要求されたとしても、そこで実際に要求されているのは、私が謝罪することではない。私の中に謝罪の気持ちが現れ出ることなのだ。（第七段）

能動とは呼べない状態のことを、われわれは「受動」と呼ぶ。受動とは、文字通り、受け身になって何かを蒙（こうむ）ることである。能動が「する」を指すとすれば、受動は「される」を指す。たとえば「何ごとかが私によってなされる」とき、その「何ごとか」は私から作用を受ける。ならば、能動の形式では説明できない事態や行為は、それとちょうど対をなす受動の形式によって説明すればよいということになるだろうか。（第八段）

確かに、謝罪することは能動とは言いきれなかった。だが、それらを受動で表現することはとてもできそうにない。「私が歩く」を「私が歩かされている」と言い換えられるとは思えないし、謝罪が求められている場面で「私は謝罪させられている」と口にしたらどういうことになるかはわざわざ言うまでもない。（第九段）

能動と受動の区別は、全ての行為を「する」か「される」かに配分することを求める。しかし、こう考えてみると、この区別は非常に不便で不正確なものだ。能動の形式が表現する事態や行為は能動性のカテゴリーにうまく一致しないし、だからといってそれらを受動の形式で表現できるわけでもない。（第十段）

だが、それにもかかわらず、われわれはこの区別を使っている。そしてそれを使わざるをえない。どうしてなのだろうか。もう一度、

能動の方から考え直してみよう。(2)われわれは、「私が何ごとかをなす」という文がもつ曖昧さを指摘した。たとえば「私が歩く」が指し示している事態とは、実際には、「私のもとで歩行が実現されている」ことだ。(第十一段)

では、この二つは、いったいどこがどうずれているのだろうか。「私が歩く」と「私のもとで歩行が実現されている」の決定的な違いは何だろうか。「私が歩く」から「私のもとで歩行が実現されている」を引いたら、何が残るだろうか。(第十二段)

能動の形式は、意志の存在を強くアピールする。この形式は、事態や行為の出発点が「私」にあり、また「私」こそがその原動力であることを強調する。その際、「私」の中に想定されているのが意志である。つまり「私が歩く」は私の意志の存在を喚起する。しかし、「私のもとで歩行が実現されている」はそうではない。(第十三段)

意志とは実に身近な概念である。日常でもよく用いられる。だが、それは同時に謎めいた概念でもある。意志とは一般に、目的や計画を実現しようとする精神の働きを指す。意志は実現に向かっているのだから、何らかの力、あるいは原動力である。ただし、力ないし原動力とはいっても、制御されていない剝(む)き出しの衝動のようなものではない。意志は目的や計画をもっているのであって、その意味で意志は意識と結びついている。意志は自分や周囲の様々な条件を意識しながら働きをなす。おそらく無意識のうちになされたことは意志をもってなされたとは見なされない。(第十四段)

意志は自分や周囲を意識しつつ働きをなす力のことである。意志はそれまでに得られた様々な情報をもとに、それらに促されたり、急(せ)き立てられたりと、様々な影響を受けながら働きをなす。ところが不思議なことに、意志は様々なことを意識しているにもかかわらず、そうして意識された事柄からは独立しているとも考えられている。というのも、ある人物の意志による行為と見なされるのは、その人が自発的に、自由な選択のもとに、自らでなしたと言われる行為のことだからである。誰かが「これは私が自分の意志で行ったことだ」と主張したならば、この発言が意味しているのは、自分がその行為の出発点であったということ、すなわち、様々な情報を意識しつつも、そこからは独立して判断が下されたということである。(第十五段)

意志は物事を意識していなければならない。つまり、自分以外のものから影響を受けている。にもかかわらず、意志はそうして意識された物事からは独立していなければならない。すなわち自発的でなければならない。(第十六段)

(3)意志は自分以外のものに接続されていると同時に、そこから切断されていなければならない。われわれはそのような実は曖昧な概念

を、しばしば事態や行為の出発点に置き、その原動力と見なしている。（第十七段）

（國分功一郎「中動態の世界」より）

〔注〕プロセス――過程。
意志する――物事を深く考え、積極的に実行しようとすること。
カテゴリー――範囲。

〔問1〕(1)しかし、「自分で」がいったい何を指しているのかを決定するのは容易ではないし、「意志」を行為の源泉と考えるのも難しい。とあるが、「『自分で』がいったい何を指しているのかを決定するのは容易ではない」と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　他者と関わる行為では、相手に心から求められていることを理解して行動することが優先され、自分の意志は後回しになると考えたから。

イ　自分の意志で行っていると感じる行為の中には、心の中で起こることのように、自分の思い通りに操作できないものがあると考えたから。

ウ　心の中で起こる行為は、意志ではなく特定の条件が起因となると言われているが、自分でその条件を整えることはできないと考えたから。

エ　意志による行為では、自分の思考を統制することが不可欠だが、様々な想いが心の中で巡らないよう集中することは難しいと考えたから。

〔問2〕(2)われわれは、「私が何ごとかをなす」という文がもつ曖昧さを指摘した。とあるが、「『私が何ごとかをなす』という文がもつ曖昧さ」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　能動の形式で表現される行為の中には受動の行為も含まれており、表現から能動と受動を区別することは不便で不正確だということ。

イ　謝罪のように能動の形式で表現される事態や行為を受動の形式で表すと、行為の意味が変化して正確な表現でなくなるということ。

ウ　「私」を省略することができる能動の形式では、誰からの作用を受けての行為であるかを理解することは困難であるということ。

エ　能動の形式で表現される事態や行為であっても、自分で意志をもって行うという能動の概念に当てはまらない場合があるということ。

□

〔問3〕この文章の構成における第十二段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　それまでに述べてきた能動の形式の特徴について、それに反対する立場から、別の見解を示すことで話題の転換を図っている。

イ　それまでに述べてきた能動と受動の関係について、筆者の体験を基に、根拠となる事例を挙げることで自説の妥当性を強調している。

ウ　それまでに述べてきた能動の形式の課題について、具体例に分析を加え、改めて問題点を整理することで論の展開を図っている。

エ　それまでに述べてきた能動の形式の効果について、新たな視点を示し、詳しい説明を加えることで論を分かりやすくしている。

□

〔問４〕(3)意志は自分以外のものに接続されていると同時に、そこから切断されていなければならない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　意志は、自分自身や身の回りの様々な条件など多くの情報から影響を受けるものであるが、一方で意志による行為は、主体的な判断によって自ら行うものであると見なされていると考えたから。

イ　意志は、目的や計画を実現しようとする精神の働きであるため、周囲の影響を受けて当初の目的が変化したとしても、計画を実現することは変わらないものであると見なされていると考えたから。

ウ　意志は、行為の原動力であり、事態や行為の起点が自分自身にあることを強く意識させる反面、自分の意識からも制約を受けることのない自由な心の働きであると見なされていると考えたから。

エ　意志は、意識と結びついて目的や計画を実現するために必要な情報を選択しようとする自発的な力であるが、よりよい選択をするためには客観的な判断力も必要であると見なされていると考えたから。

□

〔問5〕　国語の授業でこの文章を読んだ後、「自分の意志をもつこと」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

20　100　200

五

次のA及びBは、それぞれ夏目漱石（なつめそうせき）の漢詩に関する対談と文章の一部であり、［　　］内の文章は、Bの漢詩の現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

陳　明治のころまでは漢詩をつくる人がずいぶんいたわけです。新聞には漢詩の欄がありましたし、俳句とか短歌と同じように自作の漢詩を投稿する人たちがいました。新聞から漢詩欄が消えたのはいつでしたかね？

石川　大正六年です。

陳　日本人はずっと漢文を書いていたわけですね。漢文が正本で、仮名本が副本でしたから、いつの時代でも漢字が先でした。最初の日本の記録である聖徳太子（しょうとくたいし）の「十七条の憲法」も漢文です。『土佐日記』に「男もすなる日記（にき）というものを女もしてみむとて」というのがありますが、男は日記を漢文で書いていたんですね。もっとも、紀貫之（きのつらゆき）は男だけれども、仮名文字で書くには〝女〟にならなければならなかった。

　返り点を打つなどして日本人は相当に苦心して漢文を使おうとしたわけですから、「二重言語使用者」なんですね。ヨーロッパでラテン語をやっているといってもだいたい似ていますが、日本と中国は別の言葉です。ア<u>かつて日本人は、まったく違う言葉を日常レベルで二つ持っていたのですから、よほど訓練が行き届いていたんだと思います。</u>

石川　同感です。日本は漢字をもらったので、日本の文化と中国の文化は近いと思う人が多いけれども、実際は異質の文化といえます。(1)<u>日本の古典と漢文とを車の両輪のようにずっとやってきたという特殊性があった。</u>

陳　イ<u>もし日本が漢字、漢文を取り入れていなければ、近代化はありえなかったと思うほどです。</u>

石川　日本人は漢字を取り入れたことで高い文化を持てるようになった。特に、江戸時代の漢詩はかなりのレベルになっています。自由自在につくって、しかもなおかつ日本の美意識が出ていますからね。

　なぜ、あれほど高くなったかといえば、徳川幕府が文治政策を強力に推し進めていたことでしょう。武士の世界だけれども文治を重要視した。その結果、裾野がワーッと広がって山が高くなったということでしょう。民間には寺子屋や塾がたくさんできましたし、各藩には藩校が設けられた。その中心が湯島聖堂ですね。

(2)

陳｜各藩も文治政策を取らないとにらまれましたからね。あまり剣道ばかりやっていると謀反でも起こすんじゃないかと怪しまれた。特に＊加賀百万石なんかそうですけど、茶道なども含めて文化に力を入れている。

石川　江戸期に高い水準にあったために、明治期もかなり盛んに漢詩はつくられましたね。ウむしろ江戸より盛んな面もあった。

陳　漱石は、正岡子規を読者と想定して漢詩をつくっています。だから、漱石がロンドンに留学しているときに子規は死ぬんですが、そうすると、それ以降の十年間はつくりませんからね。

石川　子規とは＊東大の予備門時代に知り合い、かなり影響を受けます。ところがロンドンに留学して中断しますが、帰国後に吐血し、健康を取り戻してからたくさんの漢詩をつくるようになります。

陳　小説『明暗』を書くときに、小説を書くとっかかりをつかもうとして漢詩をつくっていますが、これは自分の内面を自分で見つめるための詩という感じがします。

石川　『明暗』の時期の詩は七言律詩が多く、禅味を帯びていますが、表現は練られていて実に深い。エある意味では日本の漢詩の到達点というような感じもします。要するに従来の花鳥風月の漢詩とは違う、内面の告白の漢詩ですからね。また、漱石の詩をみていると、＊『唐詩選』からずいぶんと語彙や発想のヒントを得ていますね。あるいは自然と出てしまうほど身についていたのでしょう。

（陳舜臣・石川忠久「漢詩は人生の教科書」より）

B

独往孤来俗不斉
山居悠久没東西
巌頭昼静桂花落
檻外月明澗鳥啼
道到無心天自合
時如有意節将迷
空山寂寂人閑処

独往孤来　俗と斉しからず
山居悠久　東西没し
巌頭　昼静かにして　桂花落ち
檻外　月明らかにして　澗鳥啼く
道は心無きに到りて　天　自ら合し
時に如し意有らば　節　将に迷はんとす
空山寂々として　人閑なる処

幽草芊芊満古蹊　　幽草芊々として　古蹊に満つ

(3)この詩は大正五年九月三日の作で、当時小説『明暗』を執筆中の漱石は、俗了*された心持を洗い流すために漢詩を作ったものである。漱石にとって、大きな救いとなったであろうことは想像に難くないところである。

私は世間と妥協することなく、孤独の人生を歩んで来た。山中の生活も久しくなって(4)今では方角さえわからない。真昼静かな岩のほとりにはもくせいの花がこぼれ、月の明るい手すりの外には谷川の鳥が夜もさえずる。人の道も私心を去れば天の道と一致しよう。時間にもし私意があるとしたら、季節も混乱してしまうだろう。このひっそりした山中の、閑適*な暮しのあたりには、名も知れぬ草が生い茂って、古い小みちをおおいかくしている。

（和田利男「漱石の漢詩」より）

〔注〕加賀——江戸時代に加賀国（石川県）、能登国（石川県）、越中国（富山県）を領有した藩。
東大の予備門——東京大学に入学する前の準備教育機関。
『唐詩選』——唐代の漢詩選集。
俗了——俗っぽい気分になること。
閑適な——心静かに安らかなこと。

〔問1〕文中の——を付けたア～エの修飾語のうち、被修飾語との関係が他と異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問2〕　(1)日本の古典と漢文とを車の両輪のようにずっとやってきたという特殊性があった。とあるが、ここでいう「日本の古典と漢文とを車の両輪のようにずっとやってきたという特殊性」について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　日本人は、日本語と異なる規則で書き表す漢文を工夫することで取り入れ、仮名と同じように日常の中で使用してきたということ。

イ　日本人は、大陸から伝来した漢字に仮名の特徴を加えることで、日本と中国の美を併せもった新たな字を生み出したということ。

ウ　日本人は、近代化を進めるために大陸から漢字を苦心して導入し、目的や場面に応じて漢字と仮名を使い分けてきたということ。

エ　日本人は、明治時代に中国から伝わった漢詩を好み、自作の漢詩を新聞に投稿するなど和歌や俳句と同じように親しんだということ。

〔問3〕　(2)陳さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　特に文化面に力を入れた地域の特色を示すことで文治政策の理解に役立つ話を聞き出そうとし、石川さんの次の発言を促している。

イ　直前の石川さんの発言に対して賛同しつつ文治政策について補足するとともに、別の具体例を示すことで対談の内容を深めている。

ウ　剣道よりも茶道などに力を入れていた加賀藩の取り組みを示すことで文治政策のねらいに気付かせ、新たな問題を提起している。

エ　それまでの自分の発言を踏まえて幕府が進めた文治政策の影響を示し、日本の近代化が話題の中心となるきっかけを作っている。

〔問4〕 (3)この詩は大正五年九月三日の作で、とあるが、その当時の漱石の漢詩について、Aの対談ではどのように述べているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　唐の時代の漢詩だけでなく、連載中の小説から漢詩を書くための語句や発想のヒントを得て多くの七言律詩をつくったと述べている。

イ　伝統的な漢詩の題材である花の様子や鳥の鳴き声に加えて、山中の静けさや草木の茂る様子を表現した新しい漢詩であると述べている。

ウ　自然の美しさを表現した従来の漢詩とは異なり、当時の漱石の漢詩は心の内を表現していて日本の漢詩の傑作であると述べている。

エ　健康面に対する不安を取り除くために漢詩の創作に打ち込み、自分自身の内面をみつめることで大きな救いになったと述べている。

〔問5〕 (4)今では方角さえわからない。とあるが、Bの漢詩において「今では方角さえわからない」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア　俗と斉しからず　　イ　東西没し　　ウ　将に迷はんとす　　エ　人閑なる処

二〇一八年度

東京都公立高校入試問題

一

解答

(1) つくろ(う)　(2) ぶよう　(3) じゃっかん　(4) せきはい　(5) まぎ(れて)

二

解答

(1) 拾(う)　(2) 郷里　(3) 勤務　(4) 仲裁　(5) 勢(い)

三

解答

〔問1〕ウ　〔問2〕イ　〔問3〕エ　〔問4〕ア　〔問5〕エ

解説

〔問1〕何よりも上野の「昔と変わらない、心を許した相手にだけ向けた穏やかな話し方」に心を打たれ、返事もできないほど戸惑っていることに着目する。辞書を読む上野の目に自分が映っていないことに「不思議と苛立ちを覚え」て、「お前、汚い辞書使ってんな」と言ったが、すぐに「他にいくらでも言いようがあっただろう」と、「激しい後悔」を感じている。

〔問2〕「もっとも印象に残っている」上野の母の姿について、「遠い場所を追っていた」「まるで…向こう側にいる誰かを見つめているよう」とたとえを用いて、上野の母が「調べごとか、考え事」で集中している様子を表現している。

〔問3〕「わたしへの当てつけで…描こうとしているのではないか」という「おそろしく身勝手で愚かな邪推」をしていたことや、「そう思った瞬間に」上野と目が合いそうになったことから考える。

〔問4〕見開きの頁だけではなく辞書の側面にもびっしりと描かれていた「指跡」を見て、「上野の手と彼の母親の姿」を思い出し、書斎で見た上野の母の姿に、熱心に辞書を見ていた上野の姿が「重なって」いることに着目する。

〔問5〕上野が絵に描いた、母から貰った辞書の指跡に「受け継がれていく人の営み」や「辞書に書かれている字すらも…指跡で出来ているよう」に感じ、実際に触れようとしていることから考える。

四

解答

〔問1〕イ　〔問2〕エ　〔問3〕ウ　〔問4〕ア

〔問5〕（例）

習い事を選んだ理由を友達に聞かれ、「ピアノが好きだから。」と私は答えました。しかし改めて考えると、幼い頃にピアノをひいている母の姿を見て、私も母のようにひきたいと思ったことがきっかけだと気付きました。

自分の意志で決めたと思っていた選択には母の影響がありました。私は今、ピアノに関わる仕事につきたいと考えています。今後も様々な人から影響を受けると思いますが、自分の意志を大切にしていきたいと思います。（200字）

解説

〔問1〕「想いに耽る」「謝罪を求められた場合」といった、「心の中で起こること」の例をふまえて、「私が何ごとかをなす」という文は、「細かく検討してみると…言いきれないから」と説明している。

〔問2〕「指摘した」とあるので前にさかのぼり、能動と受動の区別について「能動の形式が表現する事態や行為は能動性のカテゴリーにうまく一致しない…受動の形式で表現できるわけでもない」と述べているところに着目する。

〔問3〕「では、この二つは…どこがどうずれているのだろうか」と、能動と受動の「決定的な違い」について、「歩行」を例にあげて話を進めようとしている。

〔問4〕直前で、「意志は…自分以外のものから影響を受けている。にもかかわらず、意志は…自発的でなければならない」と述べていることに注目。

五

解答

〔問1〕エ　〔問2〕ア　〔問3〕イ　〔問4〕ウ　〔問5〕イ

解説

〔問1〕ア～ウは副詞で用言を修飾している。エは連体詞で、直後の体言「意味」を修飾している。

〔問2〕「返り点を打つなどして日本人は…苦心して漢文を使おうとした」ことや、漢文と仮名という「まったく違う言葉を日常レベルで二つ持っていた」という陳さんの発言に、賛同していることから考える。

〔問3〕江戸時代の漢詩がかなりのレベルになった理由について、「徳川幕府が文治政策を…推し進めていたことでしょう」と石川さんが言ったことに、「謀反でも起こすんじゃないかと怪しまれた」と各藩も文治政策を取った理由を挙げることで陳さんは同意している。また、「加賀百万石」が茶道なども含めて「文化」に力を入れていたという、異なる例を挙げていることをおさえる。

〔問4〕石川さんの「日本の漢詩の到達点」「従来の花鳥風月の漢詩とは違う、内面の告白の漢詩」といった説明に着目する。

〔問5〕「方角」とあるので、それを表す「東」「西」といった言葉を含んでいるものを選ぶ。